真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

# あなたにできるおたすけが必ずある

教祖百四十年祭

２年前の布教キャラバン隊。教会長夫妻を中心に布教実動に励んだ

信仰初代の方々は、最初は自分がたすかるために神に縋りましたが、やがて親神様の大きな親心に気付き、「たすかりたい」との心が「人にたすかってもらいたい」との心に変わって、世界たすけのようぼくとして歩み始めました。親神様は今もなお、一人ひとりの心を見て、それも今の心だけでなく、いんねんまでも見澄まされて、ようぼくとして使いたい人をこの道に引き寄せてくださっています。

しかもそれだけでなく、ようぼく一人ひとりに相応しい「おたすけの相手」をも、近くにお引き寄せくださっているのです。私たちがおたすけの心で周囲をよく見渡せば、身上・事情はもちろんのこと、ちょっとした悩みやわずかな痛み、苦しみ、孤独感などを抱えている方がきっといるはず。そうした方の声に耳を傾け、たすかりを願って心に寄り添うことも素晴らしいおたすけです。

路傍講演、神名流し、戸別訪問など布教の形はさまざまですが、「あなたが出会う人、全てをたすけるのやで」との親の声を感じながら、たすけ心を湛え、自分にできるおたすけを日々積み重ねていきましょう。

いつもたすけがせくからに
はやくやうきになりてこい　四下り目 五ツ
むらかたはやくにたすけたい
なれどこゝろがわからいで　同 六ツ

## 四方正面

逸話篇「本当のたすかり」の中で、山本いさという方は、手のふるえるのを苦にして、教祖に「お息をかけて頂きとうございます。」と、お願いした。すると、「息をかけるは、いと易い事やが、あんたは、足を救けて頂いたのやから、手の少しふるえるぐらいは、何も差し支えはしない。すっきり救けてもらうよりは、少しぐらい残っている方が、前生のいんねんもよく悟れるし、いつまでも忘れなくて、それが本当のたすかりやで。」とお説きになった。

かく言う小生も3メートルの高さから落ちて九死に一生を得た。直ぐ横には鉄製の花壇があり、心底たすかったと思った。そして、痛みも薄らいできた頃、痺れが発症した。後遺症である。「少し痺れるぐらいは…」という言葉が頭をよぎる。

年祭活動締め括りの年、しっかりとおぢばに繋がり、心定め達成の上に勇んで勤め切りたい。（奥）

《7月月次祭　挨拶》

# 大切な旬を一生懸命に歩み 喜びと充実感を胸に湛えて

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、日頃は教祖百四十年祭の旬の御用にご丹精くださいまして、誠にご苦労様です。厳しい暑さが続く折柄、こうして大教会へお参りくださり、7月の月次祭を滞りなく心勇んで勤めさせていただき、ありがとうございました。思案するところをお話しして、月次祭の挨拶に致します。

今月初旬に、天理大学で「天理台湾学会」が開催されまして、これに東京学芸大学元学長で、現在は名誉教授を務めておられる先生が参加をされました。この方は度々と学会に出席されていますが、その度に芦津詰所に宿泊されていまして、今回もお越しになられて、夕食を共にしながら楽しく歓談をしました。

その中で、台湾に進出している各宗派の話になりました。天理教をはじめ、さまざまな宗教が台湾布教を行い成果を上げていますが、日本の仏教だけは台湾へ布教に出向いていないそうです。というのは、台湾の仏教者は教えに対する確固たる信念を持っていて、この教えで必ず救済できるという確信があるというのです。

一方、日本の仏教はそこまでの姿勢はありませんから、台湾布教は躊躇（ちゅうちょ）せざるを得ない。行ったところで太刀打ちができないのです。「教えに確信を持つ」という台湾の仏教者の姿勢はなかなか大したものだなと思います。

私たちの先人先輩も、教祖の教えは間違いないと確信を持って勇躍、世界たすけに向かわれたおかげで、今日の海外の道はあるわけです。この信じる信じないということは、人間の側の問題です。私たちは、親神様の存在と教祖の教えを信じているからこそ、私は天理教の信者であると胸を張ることができるのです。

三代真柱様は、「柱でも壁でも、自分が寄りかかっても折れたり倒れないと信じているから、これにもたれることができる。もたれてしまえば楽になるんだ。信仰も同じで、親神様、教祖を信じているからもたれることができる。親にもたれれば、悩みや苦しみから解放されて心の安寧が得られるのだ。」と、このような話を度々とお仕込みくださいました。信じてもたれるというのが順序でありましょう。そして、親神様の御守護と教祖の存命の理を信じてもたれることができれば、何かあれば縋ることができます。私たちの真実の心を受け取られて、必ず導いてくださるのです。心強い限りです。

**このみちハどふゆう事にをもうかな**
**このよをさめるしんぢつのみち　六号　4**

と教えていただきます。

教祖百四十年祭まであと6カ月。このありがたく素晴らしい教えを信じ、親におもたれし、存命の教祖にお縋りして、にをいがけ、おたすけに、丹精にと励ませていただくことで、どれほどの力を与えていただけるのか、どれだけの喜びを見せていただけるのか、計り知れません。そのためには、とにかく一生懸命に通ることだと思います。

年祭活動で求められるのは、一生懸命さです。私たち一人ひとりは、立場や立ち位置も違えば、環境も違います。同じ人などいません。しかし、教祖年祭の旬という土俵に立っているのは皆同じです。この大切な旬を、皆が一生懸命に動かせていただくということをもって、ここに皆が心を揃えて教祖年祭への残された歩みを進めさせていただきたいと思います。そして、「精いっぱいやれたな」「勇んで通ることができたな」という喜びと充実感を胸に湛えて、百四十年祭を迎えさせていただきたいと思います。教祖年祭を目指して、たすけ一条に勇んで励ませていただきましょう。

なお、7月27日から8月3日にかけて「こどもおぢばがえり」が開催されます。その後には、「学生生徒修養会・高校の部」が実施されます。夏は縦の伝道の季節と言えます。将来の教会やお道を思えば、絶好の丹精の時期でもあります。対象者に声を掛けて、おぢばへ導いて、子供たちにおぢばの楽しい思い出をつくってもらい、信仰の喜びを味わってもらいたいと思います。

併せて、日々の暮らしの中で、親子が睦まじく語り合い、交わりあって、このありがたい信仰を伝えていく努力を重ねていただきたいと思います。道は末代です。末代続くための責任と役割が、今の時代に道を通る私たちにあるということを、お互いに心に置いて、縦の伝道、子や孫に信仰の喜びを伝えるという、この我々の大切な信仰の営みをしっかりと務めさせていただきたいと存じます。どうぞよろしくお願いを致します。

今月の月次祭も結構に勤めさせていただくことができました。誠にありがとうございました。

（要約）

## 立教百八十八年　七月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、一れつ子供が可愛い一筋の親心から、慈愛溢れるお導きをなし下され、この道に引き寄せてようぼくへとお育て下さいまして、陽気ぐらしへとお連れ通り下さいます御守護の程は、誠に有難く勿体なき極みでございます。私共は、親神様の御恩を片時も忘れることなく、感謝の心で時旬の御用に励ませて頂いておりますが、その中にも、今日の吉日はおぢばより当大教会にお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、七月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、暑さ厳しき中をも今日を大切な一日と参らせて頂きました芦津の道の子達が、御恩報じの心一杯につとめに勇み立つ状を嬉しく御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

さて、今年のこどもおぢばがえりが、この月の二十七日より八月三日まで開催され、続いて九日から十三日まで学生生徒修養会・高校の部が実施されます。先人先輩が私達へと繋いで下さったこの道を、次の世代に確かと伝えていけるよう、縦の伝道に真心を込めて努めさせて頂きたいと存じます。どうか夏の親里の行事を恙なきよう進めさせて頂き、参加した少年会員、学生会員が、元のぢばで楽しい思い出を作り、信仰心を培い育ませて頂けますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、今日の時旬に相応しく、仕切っておたすけと丹精に努め、ぢばに真実をつくし運び、弛みなく成人の努力を重ねて、年祭活動締め括りの年を一手一つに勤め切らせて頂く決心でございます。

何卒、至らぬ点届かぬところは幾重にもお仕込み下さいまして、この上共によろづたすけの御守護を賜り、陽気ぐらしを目指すたすけ一条の道の上に、有り難き理をお見せ下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《7月月次祭　神殿講話》

# 教祖年祭は陽気ぐらしへと一歩大きく前進する旬

役員　加世田　洋

## 教祖がお働きくださる

自教会のある月次祭の日、おつとめを勤めて神殿講話が始まろうとしたとき、年配の役員が後ろの椅子席から崩れ落ちるように倒れ込みました。名前を呼んでも返答はなく、周りから「おさづけ」との声を受けて、私は無我夢中でおさづけを取り次がせていただきました。

参拝者全員が添い願いをし、おさづけが終わる頃に意識が戻りましたが、まだうつろな状態でしたので、救急隊員が到着し病院へと運ばれました。検査をするも大きな異常はなく、夕方には何事もなかったかのように帰ってきました。

役員は「もうろうとする意識の中で、教祖に抱かれたような何とも言えない温もりを感じた」と言います。おふでさきに、

**月日にハせかいぢう、ハみなわが子**
**たすけたいとの心ばかりで**
八号　4

と仰せくださいますように、この世界は、何とかして子供をたすけてやりたいというをやの心で満たされています。

教祖は私たちに、たすけ一条のための効能の理として「おさづけの理」をお渡しくださいました。たすけてやりたいという親心、それを誠一つの心で実現するのがようぼくの使命です。

教祖年祭は陽気ぐらしへと一歩大きく前進する旬。教祖から教えていただいた「おつとめ」を真剣に勤め、「おさづけの理」を一生懸命取り次ぐところに御存命の教祖が必ずお働きくださいます。

## どんな節の中も喜び心で

教祖年祭はたすけの旬・たすかる旬とお聞かせいただきますが、子供の成人をお促しくださる上からさまざまな節をお見せいただくこともあります。80歳になる信仰熱心な婦人ようぼくの話です。

昨年の初め頃、足が痛むと言い始め、おさづけを取り次がせていただき、お願いづとめにも願い出ていました。同居している娘と病院を受診するも、はっきりとした原因は分からずそのまま入院となりました。その後、高熱が続き、痛みも取れず、睡眠も食事もまともに取れない状態となり、2週間後に痛みの原因となる部分を取り除く手術が決まりました。

手術当日の朝に娘が教会に来ましたが、「手術の内容が急きょ変わって、片足を切断しなければならなくなった」「大腿骨骨髄炎を起こしているので足を切らないと命が危ないと言われ、どうすることもできなかった」と、泣き崩れパニック状態でした。

少し落ち着いてから話を聞いてみると、前日に本人には説明があり、娘は仕事の関係もあって当日朝に告げられ、命に関わるとの医師の言葉を聞き、他の兄妹に相談する時間もなく一人で承諾するしかなかったようでした。教会としても突然のことに、娘の気持ちに寄り添うのが精いっぱいでした。

術後の姿を見るのは本当につらく心が痛みましたが、お下がりのお水と御供米を届けると「これで命を繋いでもらった」とうれしそうに飲まれました。しかし問題はここからでした。

近畿にいる子供たちがなぜこんなことになったのかと言い争い、病院を訴えると言い出す兄妹も出てきて、家族中がまさに分裂状態となりました。われわれも間に入って話し合いをするものの、もっとこうすれば良かったのに、あれが悪いこれが悪い、と相手を責めるばかりで最悪の方向にしか進みません。そんな中を婦人は「痛みが治まっただけでもありがたいか

ら、決して病院を訴えることはしないように」と子供たちに話をしてくれました。それから少しずつ子供たちの心も変わり、こうしよう、ああしようと、先の話ができるようになりました。

3月に入り、「手術をするに当たって孫たちに別席を運んでもらう心定めをした」との胸の内を聞かせてもらいました。そこで「直接孫たちに今の思いを伝えてください」と伝えました。後日、「どの子も嫌とは言わんかったよ」と笑顔で言いますので、兵庫に住む娘と連絡を取り、その後孫3名が初席を運んでくださいました。

婦人は大きな節からも決して心折れることなく、自分のいんねんを悟り、逆にそれをきっかけに孫たちにおぢばへと繋がってもらいたいと、大教会からの打ち出しであった初席者への思いを伝えたところ動き出し、「節から芽が出る」御守護を頂戴されました。

孫たちはその後も別席順序を進め、3名が揃っておさづけの理を拝戴する喜びへと繋がりました。年祭活動の中、親の声を素直に受けてつとめたところに、大きな節からも家族が切れることなく信仰へと繋がった御守護の姿でした。

## 教祖年祭をうれしい心で迎えよう

私たちの信仰は、おぢばに繋がってこその信仰です。日頃からおぢばに心を繋ぎ、可能な限りおぢばに帰らせていただく。そして、ひのきしんや御用を通して「かみのでんぢ」である「やしき」に真実の種を蒔くことは、何よりも尊い伏せ込みとなります。

あるようぼくは、このたびの年祭活動で、教会へ参拝した際に草抜きをさせていただこうと決めて、毎日少しずつ草抜きひのきしんを始めました。すると自分が草を抜き、きれいな場所が増えていくのが楽しみになり、毎日コツコツと頑張っていました。そんな中、『天理時報』の「二代真柱様は、多忙な教務の寸暇を惜しんで草抜きに励まれた」「そして、草抜きをされる際には、お屋敷の若者にも声をかけ、共になされた」「草抜きという身近な事柄を通して、物事の観（み）方や心の治め方、日々の通り方のポイントを教えられたのである」「お屋敷に生える草を、わが事と思って求めて抜かせていただく。そこに信仰の喜びをお与えいただく。草を抜く姿の中にも、ひながたがあると言われたのである」（立教185年9月14日号）との記事を目にして、更なる勇み心で喜び心を添えて草抜きに励まれました。

ひのきしんは、いつ、どこにいても心一つで実践できますが、大教会では毎月「おやさと伏せ込みひのきしん」を実施して、芦津に繋がるお互いが月に一度足並みを揃えて、おぢばで誠真実の種を蒔かせていただいています。

しかし、毎月おぢばに帰るのは難しいという方もおられると思います。私共の部内教会では26日の遥拝式の後、それぞれの教会でひのきしんに取り組んでいます。この取り組みを始めてから、おぢばに帰る人はもちろんのこと、それが難しい人もわがこととして取り組めるようになりました。

真柱様は「三年千日の期間は、動かせていただくことが大切であります。一生懸命取り組んで、年祭当日、おぢばへ帰ってきてもこなくても、その日をうれしい心で迎えることができるように」とお促しくださいました

年祭を迎えた喜びを共に味わいたいとの思いから「来年1月26日は一人でも多くおぢばへ帰らせて頂きましょう」と声を掛けると、高齢になる信者は「私は、来年おぢばに帰るのは難しいけど、その分子供や孫たちにおぢば帰りの声掛けします」と話してくれました。

その言葉を聞いて、たとえおぢ

ばに帰ることができなくとも、身近な人に声を掛けることはできる。それも大切な御恩報じとなり、年祭当日、共に喜びの日を迎えることができるのだと感じました。

## 次代の丹精に夏の育成行事を

今年も「こどもおぢばがえり」「学生生徒修養会　高校の部」などの夏の育成行事が始まります。こどもおぢばがえりは、信仰があるないに関わらずおぢばに足を運ぶ一つのきっかけとなる行事であることは間違いありません。私たち大人は初めての人をおぢばにお連れするには相当な努力が伴いますが、子供たちはそれを簡単にしてのける力を持っています。

私どもの団参に初めて参加した、当時小学４年生の男の子が学校へ提出した「僕の大冒険」という作文を紹介したいと思います。

「この夏、ぼくは初めて家ぞくの元をはなれて大冒険をした。７月29日から８月５日までの奈良への旅だ。」で始まるこの作文は、長い道のりを経て、天理の町に着いたときの詰所の方の出迎えや、行く先々でのお茶所やスタッフにお世話になったことがつづられた後、「そしてなにより、本部の親神様のいるところでおつとめをした事が心に残っている。今こうして生きていられる事、家族、友達、環境すべてにおいて感謝して親神様にありがとうを伝えた。

こうして人間をつくったのは、世界が平和で、陽気ぐらしであるようにと考えたそうだ。だからぼくたちが戦争などをしていては親神様はとても悲しむと思う。ぼくも世界があらそわないで地球がみんなえがおであふれているそんな日がくるといいな、と思った。

ぼくはこの旅でたくさんの事を学んだ。平和ということがどれだけ幸せな事か。平和な時代に生まれてこれた事の感謝。生きる喜びを味わう事。生きていられることの感謝。礼儀の大切さ。命をいただきながらぼくたちが生きているという事。そしてみんなに支えられて今いれる事。すべてにおいて感謝したい。

帰り着いてぼくは、まっさきに両親に『ありがとう』を伝えた。まるで夢のような一週間だった。」と書かれています（原文通り）。

この少年が初めておぢばに帰り、ここまで教えに触れることができたのも、親神様のお導きは申すまでもなく、誘った子の声掛け、引率に関わった育成会員のお世話取り、そして何よりおぢばで迎えてくれた本部スタッフや詰所ひのきしんの方々の真実のおかげです。

また、ある教会ではチラシを配って参加してくれた近所のお子さんが、その後毎日教会の夕づとめに参拝に来て、拍子木やちゃんぽんを勤めてくれるようになり、今回は少年ひのきしん隊にも参加してくれることになりました。私の姪は、学校で一番仲良しの友達を誘ったところ、今年参加してくれることになったと、とても喜んでいました。どちらも信仰のない家庭の子がおぢばに繋がったのです。

こうして帰る子供たち一人ひとりの心には、大切なおぢばでの思い出として残り、将来お道へと繋がっていくきっかけになっていくものと思います。

## 最後までつとめ切ろう

教祖百四十年祭まであと６カ月となりました。「ようぼく一斉活動日」のメッセージで、中田表統領先生は「残る年祭活動を心仕切り直してつとめよう」と仰せくださいました。私自身何を仕切り直すのか思案したとき、この年祭活動で掲げた目標に向けての心の持ち方でした。思い描く姿が見えてこない現状に、「焦っても仕方がない」と、つい諦めがちになっている自分を反省するとともに、まだ半年ある期間を最後まで目標達成へ向けてできる実践に励もうと心仕切り直した次第です。

どうか、一人でも多くのようぼくがこれからも真実の信仰実践を積み重ね、おぢばへと心を繋いで御恩報じに励み、親の思いにお応えできるよう精いっぱいつとめ、御存命の教祖にお喜びいただける成人を目指して残る年祭活動を勇んでつとめ切りましょう。（要旨）

# たすけ心をもって総会に参加しよう

## 青年会「おたすけ願」の活用を

10月25日、本部中庭を会場に、「第99回天理教青年会総会」が開催されます。

今年の総会に向け、青年会では『たすかり』を心に、誰かのためにおぢばへ帰る。」とのスローガンを掲げ、会員一人ひとりが、身上や事情を抱える人のたすかりを願っておぢばへ帰ることを呼び掛けており、その具体的な手立てとして、「おたすけ願」を活用しています。

この「おたすけ願」は、たすかってほしい人や願いを記入し、さらに「そのたすかりのために、自分にできること」を書いていただきますが、青年会員に限らず、性別や年代を問わず、どなたでもご記入いただけます。大教会、詰所に回収ボックスを設けておりますので、一人でも多くの方に提出いただきたいと思います。

なお回収した「おたすけ願」は、青年会本部に提出し、総会式典終了後、青年会長・中山大亮様を芯にお願いづとめを勤めさせていただきます。

この取り組みを通して、たすかりを願う心が多くの方に波及することを願っています。どうか多くの方にご活用いただけますよう、心よりお願い申し上げます。

青年会芦津分会委員長　**井筒敏成**

## 七月月次祭　祭典役割

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 祭主 | 大教会長 | 扉者 | 川畑澄博 | 扉者 | 山田道弘 |
| 指図方 | 今川政治 | 賛者 | 石川健郎 | 賛者 | 川畑正博 |
| 献饌長 | 守田清一 | 伝供 | 加世田洋 | | |

| | 座りづとめ | 前半 | 後半 |
|---|---|---|---|
| てをどり | 大教会長<br>井筒文夫<br>岩切正教<br>会長夫人<br>前会長夫人<br>奥田富美子 | 山本義範<br>梶川和隆<br>葭内浩<br>松本さだえ<br>竹内淳子<br>梶川りよ子 | 花岡忠和<br>今川聖一<br>湯川正信<br>木村理恵<br>奥田千晶<br>花岡由紀子 |
| 地方 | 湯川正圀<br>奥田眞治<br>岩切正義 | 吉田裕和<br>河端芳雄<br>中村俊和 | 河合善洋<br>西本興正<br>望月慶太 |
| 笛 | 竹内義忠 | 樋川泰士 | 瀧本亘 |
| ちゃんぽん | 奥田正德 | 木村真次 | 新居里実 |
| 拍子木 | 井筒敏成 | 浜田宣郎 | 岡本久昭 |
| 太鼓 | 瀧本眞二郎 | 瀧本庄司 | 吉田裕樹 |
| すりがね | 岡島秀男 | 立花善文 | 松森誠太 |
| 小鼓 | 守田清一 | 西本義之 | 梶川芳征 |
| 琴 | 望月恵美 | 岩切孝子 | 山本広子 |
| 三味線 | 井筒ちぐさ | 山田秀子 | 湯川照代 |
| 胡弓 | 吉田幸子 | 松森明美 | 河合ふみ子 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 西本義之 | 中村俊和 | 岡本久昭 | 新居里実 | 西本興正 | 今川聖一 | 湯川正信 | 村田光伸 | 榎本康紀 | 瀧本亘 | 梶川和人 | 望月慶太 | 梶川芳征 | 宗我道明 | 菊池和彦 | 北村浩 | 坂井清人 | 南方洋一 | 元木慎一 |
| 河端芳雄 | 瀧本庄司 | 岩切正義 | 加世田洋 | | | | | | | | | | | | | | |

## 立教188年　こどもおぢばがえり

# 真夏のおぢばに溢れる笑顔と喜び

7月27日から8月3日まで、おぢばで「こどもおぢばがえり」が開催された。

連日40度近くの猛暑日が続いたが、日本全国、また海外からも大勢帰参し、おぢばは子供たちの笑顔と喜びで溢れた。

少年会芦津団（加世田洋団長）は、少年会本部の活動方針の中にある「子供とおぢばがえりの喜びを味わおう」「全教会からの帰参を目指そう」との打ち出しを受け、各教会に積極的な帰参を呼び掛けた。

詰所には今年から「ようこそおぢばへ」「おかえりなさい！」「こどもおぢばがえり」の3つの横断幕を掲げ、帰参者を迎えた。

期間中は、毎朝ラジオ体操を行い、18時30分からは芦津団独自の夜の行事を実施した。食堂では、「あしつ広場」を開催。ボールプールやストラックアウト、エアホッケーなどさまざまなミニゲームで少年会員を楽しませた。

2階大広間では、今年もお化け屋敷を開催。会場内からは子供たちの悲鳴が響き渡った。

1階事務所前では、学生会がかき氷、ポップコーンの販売を行い、大勢の子供たちで賑わいを見せた。また大教会長からのお土産として少年会員にうちわを配布した。

加世田団長は、「今年も大勢の子供たちがおぢばに帰ってきてくれ、たくさんの笑顔を見れてありがたかった。また、受け入れに当たり、大勢のひのきしん者の真実のおかげで無事に期間を終えることができた。誠にありがとうございました」と語った。

芦津からは、111隊、少年会員586名（内、わかぎ86名、初参加者171名）育成会員575名、合わせて1千161名が帰参した。

なお芦津鼓笛バンドは、8月1日の鼓笛オンパレードに出演し、40年連続の金賞を受賞した。

今年から新たに横断幕が帰参者を迎えた

芦津鼓笛バンド　詰所玄関前で金賞受賞のお礼演奏

《布教部》

# 布教力の強化を目指して

## 布教推進隊　全国各地へ派遣

布教部（竹内義忠部長）は、9月より12月にかけて、全国13カ所のブロックに対して布教推進隊を派遣し、各地で布教力の強化を目指す。

教祖百年祭以降、布教力の低下が全教的な課題とされています。「こどもおぢばがえり」「学生生徒修養会」「後継者講習会」など、縦の伝道に関する若年層向けの行事や活動はこれまでも数多くありますが、それに比べて布教伝道に対する活動は少なく、教会の布教力がなかなか上がらない状況が続いています。特に令和に入ってからは、新型コロナウイルスの蔓延がにをいがけのしにくさに拍車を掛けてしまい、年祭活動の最中であっても、なかなか布教に動けていない教会も少なくないでしょう。

こうした状況を考慮され、本部布教部では以前より9月を「にをいがけ強調の月」とお定めくださり、月末の「全教一斉にをいがけデー」をはじめ、全教の実動を促してこられました。さらに教祖百四十年祭に向け、9月を「全教会布教推進月間」と定められ、より一層の布教実動を促してくださっています。

芦津大教会もそれに呼応して、一昨年は全国各地に「布教キャラバン隊」を派遣し、まずは教会の芯となる教会長夫妻、後継者夫妻を対象ににをいがけ実動を実施。多くの教会長夫妻らが参加し、実動を通して布教意欲を高めてくださいました。

そして年祭活動仕上げの年となる今年は、同様に「布教推進隊」を派遣します。今回は各教会で布教に励んでくださるようぼく、信者をも対象にして、私たちと共に実動していただき、教会の布教力向上の手助けをさせていただきたいと存じます。さらにはこの実動をきっかけとして、普段から布教に励む人を一人でも増やし、各教会のにをいがけ・おたすけ活動に拍車を掛けていただきたいと思います。

教会長の皆様をはじめ、ようぼく、信者の皆様も、どうぞこの趣旨をご理解いただき、一人でも多くの方と布教実動に励み、陽気ぐらし世界を作り上げる道を共々に歩ませていただきましょう。

| ブロック | 日　時 | 場　所 |
|---|---|---|
| 沖縄 | 9月6日　沖縄分教会祭典終了後 | 沖縄分教会 |
| 兵庫 | 9月20日　13時30分 | 稗島分教会 |
| 徳島 | 9月27日　13時 | 徳島教務支庁 |
| 鹿児島 | 9月28日　13時30分 | 南國分教会 |
| 奈良① | 9月28日　9時30分 | 詰　所 |
| 大阪① | 10月12日　13時 | 大教会 |
| 東京 | 10月13日　10時 | 東京教務支庁 |
| 和歌山 | 10月29日　9時 | 和歌山教務支庁 |
| 大阪② | 11月6日　10時 | 東津分教会 |
| 北海道 | 11月16日　9時 | 當別分教会 |
| 福岡 | 11月16日　10時30分 | 門司分教会 |
| 奈良② | 11月30日　9時30分 | 詰　所 |
| 長崎 | 12月1日　13時 | 島原分教会 |
| 奄美大島 | 12月2日　13時30分 | 大島分教会 |

## 教務部報

**教養掛（7月）**

**主任**

井筒　文夫

**教養掛**

原田　晃雄・前田　清和

**修養科第1007期修了**

濱手　薫（大屋仁）
濱手サチ子（大屋仁）
茂木　笹乃（芦　南）

立教188年7月27日

**おさづけの理拝戴《6月》**

豊嶋　文（紀　周）
山田　鳴美（明　道）
増永　真一（南　國）

〈拝戴日順　3名〉

**初席《6月》**

〈1名〉上有明、東大屋、西浜、大朝、眞一、鎮名

〈順序運びより　6名〉

## ■訃　報■

**脇大分教会初代会長（吉野川部属）**
**長谷川喜代子さん**

令和7年7月13日出直された。享年98歳。

告別式は7月16日、小角正二・脇町分教会長斎主のもと、奈良県天理市内の葬祭場で執り行われた。

昭和2年徳島県美馬市で父・小角宮高、母アキヱのもとに生まれ、19年満鉄附属病院看護婦養成所卒業、20年長谷川定雄氏と結婚、23年おさづけの理拝戴、27年天理教教師補命、その後高松市、大阪市で布教所を開設して専従者として従事。平成7年脇大分教会初代会長に就任、令和3年整理統合に伴い辞職。

上級・脇町分教会、吉野川分教会の上には、つくし運びの真実を尽くされた。また常に心広く優しい人柄で周囲から慕われ、多くのようぼく、信者を導かれた。

**日台分教会長（日方部属）**
**石﨑眞之さん**

令和7年7月24日出直された。享年86歳。

告別式は7月26日、湯川正圀・日方分教会前会長斎主のもと、愛媛県松山市内の葬祭場で執り行われた。

昭和15年愛媛県松山市で父・石﨑助一、母菊江のもとに生まれ、33年松山商業高校卒業、36年おさづけの理拝戴、平成13年修養科第726期修了、平成15年日台分教会三代会長に就任。

温厚な人柄で、若い人々の丹精に勤しみ、上級・二名分教会、日方分教会の上にも真実を尽くされた。

**おやさとふしん**
**青年会ひのきしん隊　9月隊**

日程：9月2日（火）～22日（月）
対象：青年会員（OBも可）
主なひのきしん：解体作業など

**○家族入隊日　9/13（土）**

詳細は青年会芦津分会まで

## 月例統計（自令和7年1月1日～至令和7年6月30日）

| 項目 / 名称（）内教会数 | 初席 | おさづけの理拝戴 | 修養科修了 | 教人 |
|---|---|---|---|---|
| 大教会（1） | 10 | 5 | | |
| 靱（13） | 2 | | | |
| 東津（23） | 2 | 2 | 3 | |
| 吉野川（29） | 3 | 3 | 1 | |
| 島原（16） | 6 | 5 | | |
| 日方（15） | 2 | 3 | | |
| 稗島（7） | | | | 1 |
| 本津（2） | | | | |
| 日高（2） | | | | |
| 姶良（5） | | 1 | | |
| 津和（12） | 2 | | | |
| 門司（6） | | 1 | | 1 |
| 當別（6） | 1 | | | |
| 大島（26） | 6 | 1 | | |
| 沖縄（3） | | | | |
| 尼崎（2） | 1 | 1 | | |
| 四ツ山（5） | | 1 | | |
| 大冠（2） | | | | |
| 島下（1） | | | | |
| 天保山（3） | | | | |
| 青木（1） | | | | |
| 芦浪（1） | | 2 | | |
| 甲邊（1） | | 1 | | |
| 芦華（1） | | | | |
| 天津（1） | 1 | 1 | 1 | |
| 入江（1） | | | | |
| 豊野（1） | 2 | | | |
| 紀周（3） | 3 | 2 | 2 | |
| 勝明（1） | | | | |
| 神の島（1） | | | | |
| 兵庫眞洲（1） | | | | |
| 芦ノ郷（2） | | | | 1 |
| 本明勇（2） | | | | |
| 明道（1） | | 1 | 1 | |
| 芦東（1） | | | | |
| 和鎮（3） | 1 | 2 | | |
| 神滝本（1） | | | | |
| 芦明徳（1） | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 真明彰化（2） | 10 | 1 | 2 | |
| 本氣（2） | | | | |
| 芦明照（1） | | | | |
| 真伯（1） | | | | |
| 合計（209） | 53 | 34 | 11 | 4 |